



**Data**

監督: ラケーシュ・オームブラカー  
シュ・メーラ

出演: ファルハーン・アクタル/ソ  
ナム・カプール/ディヴィ  
ヤ・ダッタ/ブラカーシュ・  
ラージ/パワン・マルホトラ  
/アート・マリク/ジャプテ  
ージ・シン/ヨグラージ・シ  
ン/デーウ・ギル

## 👁️👁️ みどころ

多くの日本人は、エチオピアのアベベ選手は知っているも、インドのミルカ選手は知らないはず。1947年のインド・パキスタン分断の悲劇に見舞われた小さな村の少年は、いかにして国家を代表するトップランナーに成長したの？

インド映画の賞を総ナメにした本作は、そんなミルカの伝記映画ではなく、まさに魂と自負と誇りの三位一体で作られた傑作！裸足で走り慣れていたのはアベベと同じだが、その数奇な運命の中でたどりついた「空飛ぶシク教徒」の走りを、あなた自身の目でしっかりと！

— \* — \*

## ■□■ 『走れコウタロー』『走れメロス』VS「走れミルカ」 ■□■

私たち団塊世代の男たちは『走れコウタロー』や『走れメロス』は知っているも、「走れミルカ」は知らないはず。『走れコウタロー』は1970年7月に発売されたフォークグループ、ソルティー・シュガーの2枚目のシングルで、100万枚近い大ヒットになった曲。『走れメロス』は太宰治の小説だが、「走れミルカ」とは一体ナニ？

ハリウッドと呼ばれ、ハリウッド以上の映画製作規模を誇るインド映画の特徴は、華やかな音楽と踊り。しかし、近時は『めぐり逢わせのお弁当』(13年)、『シネマルーム33』(45頁参照)のような心温まる物語や『チェイス!』(13年)のようなド派手な追跡劇等、音楽と歌だけに頼らず、ストーリーの面白さで魅了する映画も増えてきた。そんな流れの中で登場したのが、インドの20世紀を代表する国民的英雄である陸上選手、ミルカ・シンの激動の半生を描いた本作だ。

そう聞くと、ありきたりの伝記映画のように思えて少し腰が引けてくるが、さにあらず。インドを舞台としたイギリス映画『スラムドッグ\$ミリオネア』(08年)、『シネマルーム22』29頁参照)や、リオデジャネイロを舞台としたイギリス映画『トラッシュ! この街が輝く日まで』(14年)と同じように、インド映画も子供の描き方が実にうまい。本作でも少年時代のミルカ(ジャプテージ・シン)をタップリと登場させたうえ、1947年にインドとパキスタンが別々の国家として独立することによって起きたミルカたち家族の悲劇を描くことによって、ストーリーに深みを加えている。また、本作に向けて「走れミルカ」の趣旨にふさわしく、肉体を大改造したファルハーン・アクタルも、単なる走るマシンではなく、喜怒哀楽をタップリ含み、ユーモア溢れる魅力的な男性として描かれているから、そのストーリーは興味深い。

『走れコウタロー』とも、『走れメロス』とも全く違う、「走れミルカ」の楽しさを本作でタップリと!



© 2013 Viacom18 Media Pvt. Ltd & Rakeysh Omprakash Mehra Pictures  
提供: 日活 配給: 日活/東宝東和 2015年1月30日全国ロードショー  
TOHO シネマズ 梅田、TOHO シネマズ なんば、TOHO シネマズ 二条他

## ■□■なるほど、うまい演出! 2人のコーチが語り部に! ■□■

私は全く知らなかったが、本作を監督したのは「インドの新しい波、新しい世代を表現する代表的な映画監督」と称されるラケーシュ・オームプラカーシュ・メーラ監督で、今ではインド映画界で最も尊敬されている映画監督の1人らしい。本作は153分と長尺だ

が、中だるみ状態になることは全くなく、始めから終わりまでずっと緊張感を持ってスクリーンを見つめることになる。それは「なるほど、うまい演出！」と思わせるラケーシュ監督の名演出によるものだ。

本作は1960年のローマオリンピック、陸上競技400m決勝でトップを走っていたミルカが、なぜかゴール直前に後ろを振り向いたため優勝を逃してしまうシーンを見せて、観客に「アレレ・・・」と思わせるところから始まる。①1958年の東京でのアジア大会において、200mと400mで金メダルを獲得し、②1958年のコモンウェルス（英連邦）大会において、400mで金メダルを獲得し、③1960年フランスでの競技会に400m走で、45秒80の世界新記録を出したミルカは、インド代表としてローマオリンピックでは金メダル確実と期待されていたのに、この失態は一体ナニ？その秘密は、実はミルカが生まれ育ったパンジャブ州ゴーヴィンドブラ村での少年時代にあった。

ゴーヴィンドブラ村で貧乏な少年時代を過ごし、大人になってからも定職につけない生活をくり返す中で、やっと軍隊に入ることによってまともな食事にありつけるようになっただけの男ミルカが、なぜ今、インドを代表するトップランナーに成長したの？その「秘話」はミルカの最初のコーチとなった軍の陸上コーチ、グルデーウ・シン（パワン・マルホトラ）と、国家チームのコーチ、ランヴィール・シン（ヨグラージ・シン）の2人が語り部となって進んでいくことになる。『スラムドッグ\$ミリオン』は3つのストーリーを織り交ぜながら同時進行させていったが、それとよく似た、実にうまい演出だ。

## ■□■たどり着いた安定職は、陸軍！■□■

「司法制度改革」に大失敗した日本では、現在、法科大学院制度がハチャメチャなら、弁護士の就職戦線もハチャメチャ。「弁護士バッジをつけてみたけれど・・・」という悲惨な現状に陥っている。不況のご時世には公務員が人気だが、日本で意外に人気があるのが自衛隊。それは、ここに入れば3度のメシと住居、そして一定の給与が保障されるからだ。ちなみに、司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』では、足軽よりも一階級上の位で家禄10石程の下級武士（徒士身分）出身の秋山兄弟は、陸軍士官学校や海軍兵学校に入れば給料を貰えるというのが大きな動機で、軍人への道を歩むことになった。さらに、最近は刑務所に入れば3度のメシと住居（？）が確保できるからという理由で、（ムリヤリ）犯罪を犯す輩までいるそうだが、それはいかげなもの・・・？

パンフレットにある「ミルカ・シンの歩みとインドの動き」によると、ミルカの実際の生年については諸説あるが、イギリス領インド、パンジャブ州のゴーヴィンドブラ村で1935年くらいに生まれたらしい。そして、陸軍に入ったのが1951年というから、それはミルカが16歳の時だ。本作では、1947年に起きたインドとパキスタンの分離独立の動きによって、ゴーヴィンドブラ村に住むミルカたち家族がデリーの難民キャンプに逃げていくサマが描かれるが、国際情勢に疎い私たち日本人が本作を鑑賞するについては、しっかりそんな歴史を勉強する必要がある。

それはともかく、難民キャンプ出身のミルカがロクな仕事にありつかなかったのは、あながち本人の努力不足のせいだけでないことは本作を観ているとよくわかる。したがって、ミルカが陸軍に入ったのは正業に就くという観点からも大正解だったが、さらに、駆けっこで10番以内に入れば大好きな牛乳と卵をもらえるという動機で頑張ったのが大正解。その努力がグルデーウコーチの目にとまったことによって、陸上競技を始め、更に陸軍の陸上競技強化チームに参加することに。



c 2013 Viacom18 Media Pvt. Ltd & Rakeysh Omprakash Mehra Pictures  
提供：日活 配給：日活／東宝東和 2015年1月30日全国ロードショー  
TOHO シネマズ 梅田、TOHO シネマズ なんば、TOHO シネマズ 二条他

## ■□■「走れ！」は、「逃げろ！」「生き延びろ！」と同義語■□■

なぜ、難民出身のミルカが陸軍の陸上競技のランナーとして頭角を現してきたの？それは、ミルカにとって「走れ！」は「逃げろ！」「生き延びろ！」と同義語だったという、幼い時の体験のためだ。1960年にローマで開催されたオリンピックのマラソン競技で、エチオピア出身のアベベが裸足で走って優勝したシーンは、私たち日本人の目に強烈に焼きついたが、幼い頃から裸足で走り回ることには慣れていたのは本作のミルカも同じ。アベベの登場によって、アフリカの高地民族が長距離走への適性を持つことを世界に知らしめたが、ミルカにとって「走れ！」は「逃げろ！」や「生き延びろ！」と同義語だったが、彼のランナーとしての素質を開花させることになったわけだ。

1947年のインドとパキスタンの分離独立には、当然宗教問題も絡んでいた。ミルカの父（アート・マリク）が信じていたのはシク教。それがどんな教えなのかについてはパンフレットを参照してもらいたいが、シク教徒の間には男性も女性も髪や体毛を切らないという習慣があるらしい。そのため、長く伸びる髪は日常生活では邪魔になるので頭の上に丸くまとめて、その上にターバンを巻くらしい。本作では陸軍の強化選手となったミルカが、頭に白いリボンのようなターバンをつけた髪形で登場するうえ、オリンピックの試合でもそんなヘアスタイルを貫いている。これはそういう宗教上の理由によるものだ。シク教徒は、もともと現代のパキスタン側にも広がるパンジャブ地方全域で暮らしていた。そして、ここにはヒンドゥー教徒もイスラーム教徒もおり、基本的には3つの異教徒が隣

人として平和的に共存してきたらしい。しかし、1947年にインドとパキスタンが別々の国家として独立することになると、統計上イスラーム教徒が多数の地域はパキスタンに、ヒンドゥー教徒が多数の地域はインドに組み込むかたちでこの地方を分断することが突然発表され、わずか数カ月で実行に移されてしまったらしい。

本作では何度もゴーヴィンドブラ村で生活する、子供時代のミルカの姿が描かれるが、その最終のシーンは悲惨だ。ミルカの父はパキスタンから襲われるゴーヴィンドブラ村で、あくまでシク教を守るべく、「一人で千人を倒す」と宣言して戦いを挑んだが、その結果は・・・？そんな中、「逃げる！」「生き延びろ！」という父の声を受けてミルカは走り続けたが、「振り向くな！」の声に対してミルカは・・・？

## ■本作が描く、ミルカの女たちは？■

男なら誰でも初恋の経験があり、恋する理想的な女性とめぐり逢うチャンスがあるもの。したがって、彫りの深い美人が多いインドの映画なら、エンタメ作品だけではなく、芸術作品だってミルカに絡む美しい女性を登場させてくれなければ・・・。そんなサービス精神からか、あるいは史実にもとづいてかは知らないが、本作には美しく、かつ常にミルカと気持ちをつなげる姉のイシュリ（ディヴィヤ・ダッタ）の他、2人の美女が登場するので、サブストーリーとしてそれにも注目したい。

その1人は、誰が見ても「これぞ典型的なインド美人！」と思える女性ビーロー（ソナム・カプール）。ミルカがその姿を見ただけで一目惚れしたのもうなずける。涙ぐましい必死のラブコールでビーローのハートを射止めたのはさすがだが、結婚するためには定職に就くことが不可欠。そこで、いろいろな仕事にありつこうと努力した挙句にたどりついたのが陸軍だったが、陸上競技強化チームでトップになり、栄えあるブレザーを着て里帰りした時、既にビーローは・・・？「迎えにくるのを待っている」と約束したはずだったのに、そんな女の言葉を軽々しく信用したミルカがバカだったの・・・？

他方、敬虔なシク教徒であるミルカが女に対して潔癖だったのかというと、決してそうではなさそう。それは、1956年のメルボルンオリンピックで、200mと400mに出場するためにはじめて飛行機に乗って赴いたメルボルンで、オーストラリア人コーチの娘と（ふしだらに？）遊びまわる風景を見れば明らかだ。前日夜まで飲み潰れて練習に遅れたくらいは仕方ないとしても、遊び回った挙句に肝心の試合でスピードが出ず、ロクな結果が出なかったのはまさに「国家の恥」と言わざるをえない。もっとも、ラケーシュ監督の演出のすばらしさは、その後に根性を入れ替えたミルカが、ランヴィールコーチと二人三脚で取り組む、過酷な高地トレーニングの様子に表れるので、それに注目！まあ、若いのだから多少遊びに狂うのは仕方ないが、ほどほどにしなければ・・・。

## ■インドとパキスタンの友好は？■

1960年のローマオリンピックの400mで、ゴール直前に振り向いたおかげで4位に終わり、「インドスポーツ界最大の悲劇」と国中を落胆させたものの、ミルカの実力は今や折り紙付き。そんな中、犬猿の仲だったパキスタンとインドの友好化が進み、インド・パキスタン親善陸上試合が開催されることになったのは喜ばしい。1971年に名古屋で開催された第31回世界卓球選手権に6年ぶりに出場した中国が、大会終了後にアメリカなど欧米の卓球選手を自国に招待したことによって、1949年10月1日の中華人民共和国建国以来険悪だった米中関係の緊張緩和と良好な外交関係が実現したことを「ピンポン外交」と言っているが、1960年のインド・パキスタン親善陸上試合は、いわばその先駆けだ。

そこで、今やインドを代表する選手となったミルカを団長とする選手団が結成され、派遣されることになったが、どうもミルカはパキスタンに行くことに拒絶反応があるらしい。しかし、この人選はインド首相のキモ入りで決定したものだから、団長就任やパキスタン行きを断るのは到底ムリ。ミルカが少年時代を過ごし、父親の首が切断されるのを目撃したゴーヴィンドプラ村は、今はパキスタン領になっているから、インド・パキスタン親善陸上試合にインド側の団長として参加したミルカがそこを訪れるのは自由。しかし、そこを訪れれば、かつての血なま臭い風景がミルカの前に再現されるのは明らかだ。しかし、現実にはゴーヴィンドプラ村を訪れたミルカが1人大声で泣いていると、そこに声をかけてきた子供は・・・？

ここらあたりのストーリー構成と演出ぶりは、さすがラケーシュ監督と感心させられるものになっているので、それは是非あなた自身の目で。

## ■本作のクライマックスも、すばらしい実況中継と共に■

本作と同じ日に観た『KANO 1931海の向こうの甲子園』（14年）も、2日前の1月29日に観た『激戦 ハート・オブ・ファイト』（13年）も、後半からクライマックスにかけてのスリリングな試合展開はもちろん、その実況中継に興味深かった。それは、本作も同じだ。大きな心のジレンマを抱えたままパキスタンに赴いたミルカの最強のライバルになったのは、パキスタンの400mの王者アブドゥル・カーリク（デーウ・ギル）。試合前の両者のコーチを交えた「口論」は、「これが親善大会？」と疑問に思えるほどの「対立」ぶりだが、その決着はあくまで本番で！

しかして、インド・パキスタンの両首脳が見守る中で400m走の号砲が鳴ったが、さてミルカの走りは・・・？前半こそアブドゥルにリードを許したものの、後半からのミルカの走りはパキスタン大統領から「空飛ぶシク教徒」と称されるほどの見事さで、ミルカはぶっちぎりの優勝。本作最大のクライマックスになる、ミルカの走りとその実況中継の面白さは、あなた自身の目で。

2015（平成27）年2月6日記